

津山郷土博物館だより「つはく」

津博

TSUHAKU

2014.10 No.82

トピックス

夏の学習プログラム
研修・実習・体験講座
博物館資料の貸出

研究ノート

焼き松茸に津山の諸白
尾島 治

お知らせ

特別展開催中／展示資料の入れ替え

特別展開催中!

今年度の特別展「津山の商家が伝えた文人画～広瀬台山と飯塚竹斎～荻田家コレクションより」は好評開催中です。荻田家から寄贈を受けた広瀬台山と飯塚竹斎の作品を中心に20数点を展示しています。11月3日までですので、ぜひともこの機会に台山と竹斎の世界をご堪能下さい。

江戸一目図屏風の実物公開

今年度は他館への貸し出しがないため、春と同様に11月6日から11月30日まで江戸一目図屏風の実物を展示いたします。

常設展示資料の入れ替え

● 修道館の扁額

9月3日から10月1日まで、修道館の扁額を展示しました。修道館は津山藩が整備した藩校で、扁額はこの校門に掲げられていました。表には校名である「修道館」の文字が刻まれ、裏面にはこの扁額の由来が漢文で彫られています。最近まで地藏院(津山市小田中)の本堂に保管されていて、このたび寄贈されたことを契機に展示したものです。



● 津山城御殿絵図

これは津山城本丸御殿の絵図で、文化5年(1808)に作事所で作成されたものです。本丸御殿はその翌年に火災で焼失していますので、焼失以前の様子を伝える貴重な資料です。こちらも寄贈を機に表装したうえで展示しています。



どれも
見逃さないね。
博物館に
たびたび行こう!



博物館キャラクター
「鶴若」



博物館だより「つはく」
No.82 平成26年10月1日



【編集・発行】 津山郷土博物館
〒708-0022 岡山県津山市山下92
Tel (0868) 22-4567 Fax (0868) 23-9874
E-mail tsu-haku@tv.t.ne.jp

【印刷】 有限会社 弘文社

入館のご案内

【開館時間】 午前9:00～午後5:00
【休館日】 毎週月曜日・祝日の翌日
年末年始(12月27日～1月4日)・その他
【入館料】 一般…200円(30人以上の団体の場合160円)
高校・大学生…150円(30人以上の団体の場合120円)

中学生以下・障害者手帳を提示された方・
市内在住の65才以上の方は、入館料が無料です。

♣は、津山松平藩の槍印で剣大といい、現在津山市の市章となっています。



カルメ焼きをつくらう

高田小学校 5年 豊田奈々美さん

重曹を入れてまぜるとふくらむのがおもしろかった。手が痛くなったけど作るのとても楽しかった。出来たのを一口食べてみるととっても甘くておいしかったから家でも作ってみたい。

高田小学校 5年 仁木希実さん

重曹卵を入れてはやくかきまぜるところが難しかった。とてもおいしかったからまた作ってみたい。

河辺小学校 4年 土居咲月さん

カルメ焼きを作るのは、けっこう大変だった。うまいのが出来なかったので悔しかった。アルコールランプは初めてだったけれど、うまく出来た。でもすごく熱かったので軍手があつて良かった。急いでかきまぜるところが一番大変だった。すごく手がつかれた。最後カルメ焼きをあぶるところで少しだけこげてしまった。向かいの人が私が作ったのに比べたら、すごくおいしかったです。



一気にかきまぜます。
カルメ焼き、ふくらむかな？



温度を正確に測ることが
成功のカギ



夏の学習 プログラム

平成26年度は、夏の学習プログラムとして、「陶棺をつくらう」「勾玉をつくらう」「トンボ玉をつくらう」「カルメ焼きをつくらう」を実施しました。計143名の参加があり、それぞれの教室に参加したみなさんは、熱心に取り組んでいました。

勾玉をつくらう

新野小学校 2年 芦田遥さん

きれいにできてうれしかった。紙やすりでけずるのがむずかしかったです。まがたまがきれいにしあがって良かった。また作りた。

鶴山小学校 4年 三谷真穂さん

糸のこぎりでけずるところがむずかしかった。お墓から、まがたまが見つかるとは、知りませんでした。完成がとてもきれいでした。楽しかったです。

広野小学校 5年 久常佑太くん

四角い石がつやつやの真ん丸のまが玉になるまで3枚のやすりで一生けん命にみがいたら思い通りになって良かった。

保護者

結構、糸のこぎりを使ったり、やすりで削ったり、細かい作業が多くて腕が疲れました。すこしの傷も残さず美しくしようとするには細かい作業をしないではいけません。昔の人は技術が優れていたのかなと思いました。親子で参加できてよかったです。



勾玉の完成



星形の
勾玉だね

博物館キャラクター
「ファイアー」



陶棺をつくらう

加茂小学校 5年 高矢妃菜乃さん

火おこしは、とっても大変でした。今は、ライターやチャッカマンでかんたんに火がつくけど、昔は時間をかけてとってもがんばっているのを知ってすごいなあーと思いました。ミニとうかんでもけっこう時間がかかって大変だったけど、大きいとうかんはもっと大変なんだろうなあーと思いました。でもとっても楽しかったです。特にねん土で作る時が楽しかったです。またとうかんを作りたいです。できあがったとうかんは、足が全部とれてしまったのもあったから残念でした。

河辺小学校 6年 竹内菜月さん

私は、とうかん作り、野焼きや火おこしを体験して、むずかしい事もあったけど、とても楽しかったです。とうかん作りでは、初めは形を作るのにフニャフニャだったけど、形が出来るほど楽しくなっていました。とうかんの模様をほる所がむずかしかったです。火おこしでは、残念ながら、火はおきなかったけど、昔の人の生活が少しでも分かったので良かったです。今はライターとか簡単に火がつく物があるけど、昔は苦勞していた事がよく分かりました。野焼き後のとうかんを見て、前よりもがんばりようになった気がしました。少し取れていたのもあったけど、とてもよく出来ました。とうかん作りを体験できて良かったです。



博物館キャラクター
「津郷之介」



トンボ玉をつくらう

向陽小学校 6年 藤原映由里さん

赤っぽい色から、いろんな色に変化するのがおもしろい。ガラスをとかす時に「パリン」とわれたのがビックリした。自分だけのトンボ玉ができてうれしい。またやりた。

向陽小学校 6年 板谷璃子さん

一番最初は、うまくできなかつたけど、だんだん出来てきた。楽しくできてよかった。形がおかしいのもあったけどきれいな物もあった。やる前はできるか心配だったけどできてよかった。またしたいと思った。

広野小学校 5年 光井一葉さん

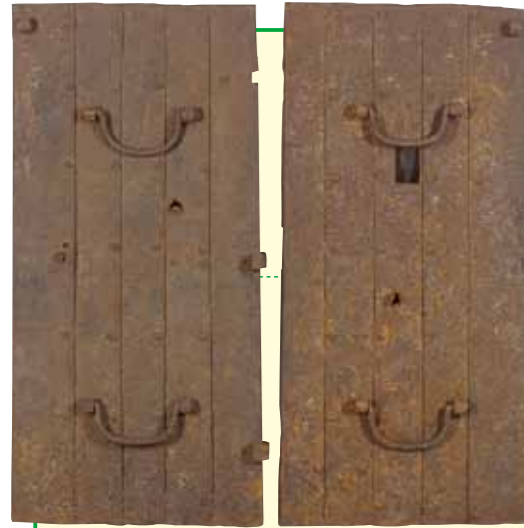
ガラスをとかす時と鉄のぼうをくるくる回す所がむずかしかったです。でも、作った事がなかったので、作文に書きたいです。お母さんや、お父さん、家族のみんなに見せたいです。

清泉小学校 5年 早瀬巧望くん

トンボ玉作りで最初はむずかしくて失敗したけど2回目、3回目とやるうちにどンドンうまくなって最後は上手にできたので良かったです。でもはずすときに少し割ってしまったので、今度やるきかいがあつたら、そこを気をつけてやりたいです。



きれいなトンボ玉が出来たよ



美作の城や武将に関する資料 岡山県立博物館へ貸出

貸出点数
5点

岡山県立博物館で開催された企画展「岡山の城と戦国武将」（7月31日～9月7日）に、森忠政が徳守神社に奉納したと伝わる鉄楯など5点を貸し出しました。

この企画展は、県内に残る主要な城を採り上げ、それを活用した戦国武将とともに城の魅力を紹介するものです。美作国では600をこえる中世城館が確認されています。近世に入ると、美作一国を支配する城として津山城が築かれました。当館からは、岩屋城関連の花房職秀書状や矢筈城関連の草刈景継書状、津山城の鬼瓦なども貸し出したほか、津山城のCG復元映像も提供しました。



貸出点数
22点

松平家の先祖ゆかりの品々 上越市立総合博物館へ貸出

津山藩主松平家は、徳川家康の次男で越前を領した結城秀康を祖としています。2代忠直の改易後、3代光長は越後高田に移りますが、越後騒動による改易を経て、その後継が津山を治めることになりました。そのため、津山松平家にも秀康・忠直・光長に関する品々が伝えられています。

今年は光長が治めていた高田に城と城下町が築かれてから400年目に当たります。上越市立総合博物館では、これを記念して特別展「越後の都 高田と徳川家康の血族」（10月4日～11月16日）が開催されます。当館からは、秀康・忠直・光長にゆかりのある資料をはじめ、熊毛槍など22点を貸し出します。この秋、北陸方面にご旅行の際は、ぜひお立ち寄りください。



出前体験講座：勾玉作り

◆学校の先生やPTAの方々へ

授業や行事などに博物館の職員が出向き、歴史を学べる体験講座を実施したり、歴史の学習に役立つ教材を貸し出したりします。また、中学生の職場体験も受け入れています。展示の見学だけでなく、幅広く活用いただけます。



博物館キャラクター
「パレ夫」

博物館に
どしどし相談
してね!



職場体験：和綴じ本の修理



博物館実習：ふすまの下張りをはがす

◆学生さんへ

学芸員資格の取得を希望する美作地域出身の学生さんの博物館実習の受講を受け入れています。

◆その他の皆さんへ

企業や団体の研修などでも博物館をご利用ください。事前のご相談があれば職員が展示解説します。また、会合などに職員が出向いて、津山の歴史についてお話しします。



新採用教員研修：展示見学

研修・実習・体験講座などで
ぜひ博物館をご利用ください

焼き松茸に津山の諸白

もろはく

— 近世社会の相場と物価 —

尾島 治

『美作ノ国吉井川』

津山の城東地区で青年期を過ごした小説家棟田博の作品には、郷土津山にゆかりの事項が題材として盛り込まれることが多い。その中でも『美作ノ国吉井川』は、明治維新を経て新時代を迎えた津山が、その舞台として設定されている。テレビドラマ化されたことから、美作地域のみなならず全国的にも知名度の高い小説である。

作品では、江戸時代以来、主要な物流システムとして長い伝統を誇る高瀬舟と共に生きてきた回漕問屋、その周囲でめまぐるしく変化していく人々の生活、そして新時代の象徴とも言える鉄道による交通運輸の劇的な変化、そうした中に生きる普通の人々の日常が、作者の温かい眼差しと郷土津山への想いを通して描かれる。

ある時、主人公の「里ん」は、吉井川が瀬戸内海に注ぐところに位置する西大寺の湊を訪れ、その新兵兵庫屋で久しぶりに石黒清吾に出会う。そして、津山出身の石黒をもてなす夕餉に饗されたのは津山産の焼き松茸で、添えられていたのは、新兵兵庫屋の主人の言葉を借りれば、「酒も津山の諸白でございます」となっている。この西大寺には、江戸時代には金岡湊が設けられていた。ここは、吉井川を上り下りする高瀬船の拠点であり、同時に、瀬戸内海から大坂や江戸に通じる廻船の拠点でもあった。

美作から下つてきた高瀬船の積み荷は、ここで廻船に積み替えられて旅立つていくのである。そのため津山関連の商人ばかりでなく、津山藩の役人も常時湊に詰めていた。

津山の諸白

さて、ここで注目するのは「津山の諸白」である。この「諸白」は、この頃、津山の旧城下町を拠点とする造酒屋栄屋で生産されていた清酒の銘柄である。大津絵の有名なモチーフである鬼三味線の中で、座して三味線を弾く鬼の傍らに置かれたとっくりに、「諸白」という文字が描かれていることから、以前の津山では、大津絵にも描かれるような特別な歴史のある銘柄の酒だと考える人もいた。

しかし、この諸白という言葉は、江戸時代よりも古くから用いられている酒造関係の用語であつて、江戸時代には固有名詞ではなかった。製造過程での白米の使用を表現した言葉で、二通りに米を使用する際に、片方だけ白米を使うものを片白、両方に白米を使うものを諸白と言つていた。そのため、江戸時代には、一般的に特定の品位の清酒を諸白と呼んでいたのである。

元禄十年（一六九七）刊行の『本朝食鑑』には、「酒〔積名〕諸白。俗称である。（略）酒の絶美なものを諸白といつてゐる。」（『東洋文庫』所収）と記されている。この「諸白」という言葉の初出は、天明二年（一七八二）二月二十三日の記事である。これは、米相場の騰貴に応じて酒の小売り値段の引き上げを實施したいとするもので、名酒は一升を越えるという事態になり、このように米相場が高騰すれば、銭での売り上げが伸びても、決済のためにそれを銀に交換するときに、売り上げの伸びが消えてしまうのである。

こうして、津山藩の町奉行日記での「諸白」という言葉の初出は、天明二年（一七八二）二月二十三日の記事である。これは、米相場の騰貴に応じて酒の小売り値段の引き上げを實施したいとするもので、名酒は一升を越えるという事態になり、このように米相場が高騰すれば、銭での売り上げが伸びても、決済のためにそれを銀に交換するときに、売り上げの伸びが消えてしまうのである。

酒値段と相場

津山城下町での酒の販売に関しては、一般の小売りでは、「壹合或壹合五勺ト申様ニ売り式三分五分八文と値二心し売候義」が一般的であつた。量り売りを基本とする中で、少額の金額や量に応じた量り売りを行つてきた。この場合、当然、銭を用いた小口の売買が多くなる。ところが、仕入れに関する決済は銀札で行うことになり、銭に対する銀の相場が高騰すれば、小売り商人は大きな打撃を受けることになる。

先に天明二年（一七八二）二月二十三日の酒値段の引き上げを見たが、その理由は米相場の騰貴に加えて、銀相場の高騰も大きく関係していた。惣酒屋の願書には「其上銭（銀）相場百文余ニ相成小売等勞以難渋仕候」と述べられている。銀壹匁が銭百文

の書き下し文」とあり、要するに、品位の高いおいしい日本酒のことであつた。歴史的には、南都諸白や伊丹諸白といった生産地を区別する言葉としてよく登場する。ここでは、この「諸白」にちなんで、津山城下町での生活の中の酒と相場について少し考えてみたい。津山の城下町では、米相場、大豆相場、銀（銭）相場など、様々な価値や価格が相場で決まっていた。

日本酒の品位と価格

さて、日本酒にはその時代や地域によつて様々な品位の分け方があり、江戸時代の品位の分け方は、十八世紀前半頃の津山では、名（銘）酒・上酒・中酒・下酒・下々酒となつていた。ところが、津山松平藩町奉行日記では、この品位による分類が用いられたのは、明和七年（一七七〇）十二月頃までで、それ以降は、こうした分類が町奉行日記では確認できない。これについては、生産者の事情による変化なのか、藩の販売価格統制に関連するものなのか、またはつきりしない。

こうして、津山藩の町奉行日記での「諸白」という言葉の初出は、天明二年（一七八二）二月二十三日の記事である。これは、米相場の騰貴に応じて酒の小売り値段の引き上げを實施したいとするもので、名酒は一升を越えるという事態になり、このように米相場が高騰すれば、銭での売り上げが伸びても、決済のためにそれを銀に交換するときに、売り上げの伸びが消えてしまうのである。

このように、近世の相場システムの中心では、現物の相場だけではなく、銀相場の変動によつても物価の上昇が引き起こされ、その影響は、生産者や販売者のみならず、消費者も含む多くの人々に及ぶのである。

津山城下町の商人が、「家事覚」などとして家訓を書き残していく中で、家業第一と述べ、使用人の監視を怠るなど注意喚起すると同時に、常に相場の変動に注意すべき事を指摘しているのは、至極当然のことであつた。



なく、藩の蔵米相場が基準となつてきた。これは、藩に納められた年貢米が払い下げられるもので、城下町の米仲買が入札を實施して相場価格が成立する。ちなみに、津山藩では米問屋ではなく、米仲買がその役割を果たしていた。米相場の変動はかなり激しく、一石（約三俵）が四〇匁前後から、天保の飢饉の際には一八〇匁くらいまで騰貴することもあつた。

こうして酒の品位を表す言葉として、別に「御前酒」という表現も見られる。寛政四年（一七九二）九月二日には、「御前酒迄も爰元二而出來候様致度」として、他所酒に負けな

いおいしい酒を造るようになつて、更に御前酒も造れるようになつて、更に酒販売を許可するということである。この御前酒というのは、御膳酒と呼ばれていたもので、將軍や藩主に提供する上質な酒を意味していた。

寛政四年九月二日の藩からの命令は、「酒殊外不宜候」との「御直之御

寛政4年酒値段 壹升あたり

※単位は匁

酒の種類	35~40	41~50	51~60	61~70	71~80	81~90	91~100
蔵米相場							
銘 酒	1.3~1.8	1.5~2.0	1.7~2.2	1.8~2.3	1.9~2.4	2.0~2.5	2.1~2.6
極 上 酒	1.1	1.3	1.5	1.6	1.7	1.8	1.9
諸 白 酒	0.8	1	1.2	1.3	1.4	1.5	1.6
上 酒	0.7	0.8	1	1.1	1.2	1.3	1.4
生 酒	0.5	0.6	0.7	0.8	0.9	1	1.1
下々酒	0.35	0.45	0.55	0.65	0.75	0.85	0.95